

1 宇宙の初め

宇宙の初め、天も地もいまだ渾沌としていた時に、高天原と呼ばれる天のいと高いところに、三柱の神が次々と現れた。初めに、天の中央にあって宇宙を統一する天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）。次に、宇宙の生成をつかさどる高御産巢日神（タカミムスビノカミ）。及び、同じく神産巢日神（カミムスビノカミ）。これらの神々は、みな配偶を持たぬ単独の神で、姿を見せることがなかった。

その後、天と地とのけじめのつかぬ、形らしい形もないこの地上は、水に脂を浮かべたように漂うばかりで、あたかも海月が水中を流れ流れて行くように頼りのないものであったが、そこに水辺の葦が春さきにいっせいに芽ぶいて来るように、萌え上って行くものがあった。この葦の芽のように天に萌え上ったものから、二柱の神が生れた。初めは、宇麻志阿斯訶備比古遲神（ウマシアシカビヒコヂノカミ）、うるわしい葦の天を指し登る勢いを示す男性神。次は天之常立神（アメノトコタチノカミ）で、永遠無窮の天そのものを神格化した神である。この二柱の神も配偶のない単独の神で、姿を見せることがなかった。

以上にあげた五柱の神は、地上に成った神とは別であって、これは天神である。

2 神世七代

以上の、天に現れた神々に対して、地においても次々と神々が現れた。脂のように漂っていたものの中から、まず、国之常立神（クニノトコタチノカミ）、これは生れるべき地を神格化した神である。次に豊雲野神（トヨクモノノカミ）、脂のようなものが次第に凝りかたまり、広々とした沼のようになって行くことを示している。この二柱の神も単独の神で、姿を見せることがなかった。

次に現れたのは、男神の宇比地邇神（ウヒヂニノカミ）と女神の須比智邇神（スヒヂニノカミ）、脂のように漂うものうちから、潮と土とは次第に分たれて、ようやく砂や泥を混じえた沼となったことを示している。次に男神の角杙（ツノグヒノカミ）と女神の活杖神（イクグヒノカミ）、沼地の泥が次第に固まり、角のように春芽が芽ぶいて育って行くことを示している。次に、男神の意富斗能地神（オホトノヂノカミ）と女神の大斗乃弁神（オホトノベノカミ）、すなわち広やかな大地がここに固まったことを示している。

次に男神の淤母陀琉神（オモダルノカミ）、大地の表が不足なくととのったことを示し、女神の阿夜訶志古泥神（アヤカシコネノカミ）、この時「あやにかしこし」とあげた悦びの声を神格化したものである。次に現れたのは、男神の伊邪那岐神（イザナギノカミ）と女神の伊邪那美神（イザナミノカミ）、すなわち後に述べるように、互いに誘いあった神の意味である。

以上に述べたところがクニノトコタチノ神からイザナミノ神に至るまでを「神世七代」と言う。これは最初の二柱の神はそれぞれ一代、男神女神双んで現れた十柱は、それぞれ

れ二神を合せて一代とする計算である。

3 伊邪那岐命と伊邪那美命

さて初めに宇宙に現れた三柱の天神は、この時、相談の上、伊邪那岐命（イザナギノミコト）と伊邪那美命（イザナミノミコト）との二柱の神に、次のような言葉を与えた。

「地上の有様を見るに、まだ脂のように漂っているばかりである。お前たちはかの国を、人の住めるように作りあげよ。」

このように命令して、天沼矛という玉飾を施した美しい矛を授けた。国をつくるという重い役目を負わされたイザナギとイザナミの二柱の神は、天と地との間に懸けられた天浮橋の上に立ち、授けられた矛を、海の上に脂のように漂うものの中へ突き下して、ぐるぐると掻きまぜた。掻きまぜるにつれて、初めは水のように薄いものが、次第に膏の煮かたまるように、こおるこおると凝って行き、やがて海の水からその矛を引き上げると、矛の先を伝わって一滴一滴と潮がしたたり落ちた。そのしたたり落ちた潮が、次第に積もりかたまつてついに島となった。これを淤能碁呂島と呼ぶが、これは神神の生んだ島でなく、しぜんと凝りかたまって出来た島という意味である。

二柱の神はそこで天浮橋から、新しく出来たこの島へと下ってみた。そこで地形を見届けて、ほどよいところに太い柱を立て、それを中心として八尋もある広い御殿を建てた。その上で、イザナギノ命は妻のイザナミノ命に次のように尋ねた。

「お前の身体は、どのように出来ているのか？」

「私の身体は、これでよいと思うほどに出来ていますが、ただ一ところだけ欠けて充分でないところがございます。」

こう女神は答えた。イザナギノ命はそれを聞いて言うには、

「私の身体は、これでよいと思うほどに出来ているが、ただ一ところ余分と思われるところがある。そこでどうだろう、私の身体の余分と思われるところを、お前の身体の欠けているところにさし入れて、国を生もうと思うのだが。」

「それは宜しゅうございましょう。」

こうイザナミノ命も同意した。

「それでは私とお前とで、この中央の柱のまわりを両方から廻り、行き会ったところで夫婦のかためをしようではないか。」

このように約束を定めて、さらに男神が言うには、

「それならばお前は柱の右側から廻りなさい。私は左側から廻ろう。」

約束がととのい、男女の神はいよいよ柱の右と左とから廻り始めたが、その時にイザナミノ命が、まず、

「あなにやしえおとこを。」

ああなんというみめうるわしい人でしょう、と感嘆した。

そのあとを追って、イザナギノ命が、

「あなにやしえおとめを。」

ああなんというみめうるわしい乙女だろう、と感嘆した。

共に声を上げてのちに、イザナギは妻なる女神に、

「女の方が先にものを言ったのは、よくないしるしだ。」

こう叱言を言ったが、しかしそのまま寝所へは行って共に寝た。やがて生れたのは骨のない水蛭にも似た醜い水蛭子だったので、この御子は、葦の葉を編んで作った葦船に入れて、流し棄ててしまった。次に生れたのは淡島、これは軽んじ憎むという意味からつけられた名称であろう。この淡島も、御子のうちには数えない。

男神と女神とはそこで顔を見合せて嘆いた。

「いま二人の子を生んだが、これはどちらも出来そこないだった。どうしてこういうことになったのか、一つ天神のところに参上してお伺いしてみようではないか。」

こう相談して、一緒に高天原に登り、天神に意見を訊くことにした。天神の方では、神意を尋ねるときに用いる、牡鹿の肩骨を灼いてその割目の形で吉凶をはかる、太占の占いを立てた。その結果、

「女の方が先に言葉を発したというのが、こんな失敗をした原因なのだ。もう一度戻って、今度は間違いのないように言い直すがよい。」

こう命令した。

そこで二柱の神は、ふたたびおのごろ島へとくだり、御殿の中央の柱をまた右と左とから廻り始めた。今度は失敗しないように、イザナギの方が最初に、

「あなにやしえおとめを。」

ああなんというみめうるわしい乙女だろう、と嘆じ、そのあとからイザナミが、

「あなにやしえおとこを。」

ああなんというみめうるわしい人でしょう、と唱和した。

このように言葉を交してから共に寝たが、今度は道にかなっていたと見えて、次々に国を生んだ。最初に生んだのが淡道之穂之狭別島、これはのちの淡路島を人格化した名称。次に生んだのが、のちの四国である伊予之二名島、二名というのは四国は山脈によって二並びに分れている意味。この島は身体が一つなのに、顔が四つあり、その顔の一つ一つに名前がついている。すなわち伊予の国をうるわしい乙女の意の愛比売（エヒメ）と言い、讃岐の国を、飯を産する国を男性化した飯依比古（イヒヨリヒコ）と言い、粟の国を、粟を産する国を女性化した大宜都比古（オホゲツヒメ）と言い、土佐の国を雄々しき男子の意の建依別（タケヨリワケ）と言う。次に生んだのが隠伎之三子島、海原の沖合にある三つの島の意味で、別名を天之忍許呂別（アメノオシコロワケ）という。次にのちのち九州である筑紫の島を生んだ。この島も身体が一つなのに顔が四つあって、顔の一つ一つに名前がついている。すなわちのちの筑前筑後である筑紫の国を、白日別（シラビワケ）と言い、のちの豊前豊後である豊国を、豊日別（トヨビワケ）と言い、のちの肥前肥後である肥の

国を、建日向日豊久土比泥別（タケヒムカヒトヨクジヒネワケ）と言い、熊曾族の住んだ熊曾の国を。建日別（タケビワケ）と言う。いずれも国土に対する美称である。次に生んだのが、のちの壱岐である壱伎の島、別名を離れ小島の意味の天比登都柱（アメヒトツバシラ）と言う。次にのちの対馬である津島、別名を天之狭手依比売（アメノサデヨリヒメ）という。次に生んだのが佐度の島。次に生んだのが大倭豊秋津島、五穀の豊かにみのある島の意味で、のちの本州の総名である。別名を、同様の美称によって天御虚空豊秋津根別（アメノミソラトヨアキツネワケ）と言う。以上にあげた八つの島は、イザナギ、イザナミの二神が初めに生んだ島々なので、これらを総称して特に大八島国と呼ぶ。

さて二柱の神は八つの島を生んだのちに、ふたたびおのごろ島へと戻ったが、その間にさらに次のような島を生んだ。まず吉備児島、別名は建日方別（タケヒガタワケ）。次に小豆島、別名は大野手比売（オホノデヒメ）。次に大島、別名は大多麻流別（オホタマルワケ）。次に女島、別名を天一根（アメヒトツネ）。次に知訶島、別名を天之忍男（アメノオシヲ）。次に両児島、別名を天両屋（アメフタヤ）と言う。

吉備児島から天両屋島まで、合せて六島となる。これらは瀬戸内海及び北九州沿岸の島々である。

以上のような国を生む仕事が終わって、今度は神を生む番になった。

そこでまず生んだ神の名は、大事の成ったのを称えた大事忍男神（オホコトオシヲノカミ）である。次に生んだのは、壁を作る石や土を称えた石土毘比売神（イハツチビコノカミ）。次に、石砂を称えた石巢比売神（イハスビメノカミ）。次に、入口の門を称えた大戸日別神（オホトビワケノカミ）。次に、屋根を葺くことを称えた天之吹男神（アメノフキヲノカミ）。次に、屋根を称えた大屋毘古神（オホヤビコノカミ）。次に、風害を防ぐ神である風木津別之忍男神（カザケツワケノオシヲノカミ）。これらの六神は家屋を守護するところの神々である。次に生んだのは海を統べる神で、その名は大綿津見神（オホワタツミノカミ）。次には水戸、すなわち河口を統べる神で、その名は水の流れの速いところで穢を祓う意味の速秋津日子神（ハヤアキヅヒコノカミ）。次にはその女神である速秋津比売神（ハヤアキヅヒメノカミ）を生んだ。

オホコトオシヲノ神からアキヅヒメノ神まで、合せて十柱の神となる。

最後に生まれたハヤアキヅ彦とハヤアキヅ姫の二柱の神は、河から海に入る水戸を統べる神であるから、互いに河と海との片方ずつを分担し合って、次のような神々を生んだ。すなわち、水泡の和ぎ渡ったことを示す沫那芸神（アワナギノカミ）。次に波の立ち騒ぐことを示す沫那美神（アワナミノカミ）。次に水をつぶつぶと泡立つ様を示す頼那芸神（ツラナギノカミ）。次に同じく頼那美神（ツラナミノカミ）。次に灌漑のことをつかさどる天之水分神（アメノミクマリノカミ）。次に同じく国之水分神（クニノミクマリノカミ）。次に、水を汲む柄杓を持つ意でやはり灌漑の神である天之久比奢母智神（クニノクヒザモチノカミ）である。

アワナギノ神からクニノクヒザモチノ神まで、合せて八柱の神となる。

さてイザナギ、イザナミの二神は、さらにつづけて風の神、その名は息の長いことを示す志那都比古神（シナツヒコノカミ）を生んだ。次に生んだのは木の神で、その名は茎を美化した久久能智神（ククチノカミ）。次に生んだのは山の神で、その名は大山津見神（オホヤマツミノカミ）。次に生んだのは野の神で、その名は鹿屋野比売神（カヤノヒメノカミ）。屋根を葺くための萱や薄の類を称えた名前で、別名を野椎神（ノヅチノカミ）と呼ぶ。

シナツヒコノ神からノヅチまで、合せて四柱の神となる。

最後に生まれたオホヤマツミノ神とノヅチノ神の二柱の神は、山野を統べる神であるから、互いに山と野との片方ずつを分担し合って、次のような神々を生んだ。すなわち、けわしい坂路をつかさどる天之狭土神（アメノサヅチノカミ）。次に同じく国之狭土神（クニノサヅチノカミ）。次に峠の境界をつかさどる天之狭霧神（アメノサギリノカミ）。次に同じく国之狭霧神（クニノサギリノカミ）。次に日の光の射さぬ谷間をつかさどる天之闇戸神（アメノクラドノカミ）。次に同じく国之闇戸神（クニノクラドノカミ）。次に山のゆるやかな傾斜面をつかさどる大戸惑子神（オホトマトヒコノカミ）。次に同じく大戸惑女神（オホトマトヒメノカミ）。

アメノサヅチノ神からオホトマトヒメノ神まで、合せて八柱の神となる。

さてイザナギ、イザナミの二神は、さらに仕事をつづけて、次に水鳥のように速く進む桶で造った船を称えた鳥之石楠船神（トリノイハクスブネノカミ）を生んだ。これは交通をつかさどる神で、別名を天鳥船（アメノトリフネ）と言う。次に食物をつかさどる大宜都比売神（オホゲツヒメノカミ）を生んだ。次に火をつかさどる火之野芸速男（ヒノヤギハヤヲノカミ）を生んだ。この神は別名を火之炫毘古神（ヒノカガビコノカミ）と言い、また火之迦具土神（ヒノカグツチノカミ）と言う。この御子は燃える火の神であったために、御子を生むにあたってイザナミの女神は陰処を焼かれて、そのため煩って床に就いた。その時に女神の嘔吐したものから生れたのが、鉾山をつかさどる金山毘古神（カナヤマビメノカミ）。次に糞から生れたのは、肥料をつかさどる波邇夜須毘売神（ハニヤスビメノカミ）。次に尿から生れたのは、耕地を灌漑する水をつかさどる弥都波能売神（ミツハノメノカミ）。次に生れたのは、穀物の生育をつかさどる和久産巢日神（ワクムスビノカミ）。この最後の神の御子を、豊宇気毘売神（トヨウエビメノカミ）と言う。これは多くの食物をつかさどる神である。イザナミの女神は、火の神を生む時に受けた傷が重くなって、ついにこの世を去って黄泉国へ旅立った。

天鳥船からトヨウケビメノ神まで、合せて八柱の神となる。

イザナギ、イザナミの二神が、力を合せて生んだ島のは数は14、神の数は35。

この計算は、イザナミがこの世を去る以前に生んだものの数である。ただしおののろ島は生んだものではない。また蛭子と淡島とも、御子の数のうちにははいらない。

女神の死にあたって、イザナギノ命は悲しみのあまり、声をあげて叫んだ。

「いとしい我が妻よ。たかが一人の子供のために、二人とないお前を失ってしまったとは！」

こう言って嘆き悲しむと、もはや答えることもなく横たわっている女神の、あるいは枕の方に身をよじって悶え、大声をあげて涙の流れるのにまかせた。その時にイザナギの涙から生れた神は、大和の香具山の山裾にある木の下にいて、その名は泣沢女神（ナキサハメノカミ）と言う。しかし息の絶えた女神を、もはやこの世に甦らせることは出来なかったら、その亡骸を出雲の国と伯伎の国との境である比婆之山に埋葬した。

しかしイザナギノ命は、妻に先立たれた痛恨のあまりに、腰に帯びた、長さ十握もある十拳剣をすりと引き抜くと、不幸の原因となった御子の火の神、カグツチノ神の頸を切り放った。その時、手にした剣の切先についた血は、累々と横たわる石また石の上にほとばしり流れ、そこに神々が生れた。その名は石拆神（イハサクノカミ）、次に根拆神（ネサクノカミ）、次に石筒之男神（イハツツノヲノカミ）。以上の三神は、刀剣を鍛える時の石鎚を称える神であろう。次いで剣の鏝際についた血も、累々と横たわる石また石の上にほとばしり流れ、そこに生れた神々の名は、甕速日神（ミカハヤビノカミ）、次に樋速日神（ヒハヤビノカミ）、次に建御雷之男神（タケミカツチノヲノカミ）、この最後の神の別名は建布都神（タケフツノカミ）、あるいはまた豊布都神（トヨフツノカミ）。以上の三神は、刀剣を鍛える時の火の働きを称えた神であろう。次いで剣の柄に集まった血は、指の股からしたたり落ちて、そこに生れた神々の名は、闇淤加美神（クラオカミノカミ）、次に闇御津羽神（クラミツハノカミ）。これらは雨をつかさどる竜神であり、清冽な谷間の水をつかさどる水神である。

ここに述べたイハサクノ神からクラミツハノ神まで、合せて八柱の神は、イザナギノ命の手にした剣から生れた神々である。

父の神によって切り殺されたカグツチノ神の、その切られた頭から生れた神の名は、山のけわしい頂きを称えた正鹿山津見神（マサカヤマツミノカミ）、次にその胸から生れた神の名は、山の麓を称えた淤藤山津見神（オドヤマツミノカミ）、次にその腹から生れた神の名は、深山を称えた奥山津見神（オクヤマツミノカミ）、次にその陰処から生れた神の名は、暗い谷間を称えた闇山津見神（クラヤマツミノカミ）、次にその左手から生れた神の名は、鬱蒼たる樹木を称えた志芸山津見神（シギヤマツミノカミ）、次にその右手から生れた神の名は、麓の山を称えた羽山津見神（ハヤマツミノカミ）、次にその左足から生れた神の名は、平かな峰を持つ山を称えた原山津見神（ハラヤマツミノカミ）、次にその右足から生れた神の名は、端にある山を称えた戸山津見神（トヤマツミノカミ）。

マサカヤマツミノ神からトヤマツミノ神まで、合せて八柱の神となる。

一方、イザナギの手にした剣は、その名を天之尾羽張と言う。その別名は伊都之尾羽張で、いずれも鋭利な名刀の意味である。

4 黄泉国

最愛の妻に先立たれたイザナギノ命は、ひとり悲嘆のうちに暮していたが、時が経つにつ

れても、その悲しみは少しも薄らぐことがなかった。妻のイザナミはこの世を旅立って、意味は黄泉国にいるはずだった。イザナギノ命は、もう一目、妻に会ってみたい気持をとどめることが出来ずに、ついにそのあとを訪ねて、この世のものならぬ地下の世界へと降って行った。

黄泉国、別名は、暗黒の夜を思わせる夜見之国、また別名は、地下の国を意味する根堅洲国、あるいは根国、これは死者の世界である。この国は、生きた者の来ることをかたく禁じて、その御殿は、冷たい石の扉がしっかりと現世との間を鎖していた。しかし夫のイザナギノ命が、はるばるとここまで訪ねて来たのを知って、妻なる女神は、扉のところまで迎えに出た。そこでイザナギは、扉ごしに、次のような優しい言葉で呼びかけた。

「いとしい我が妻よ。私がお前と一緒に作った国は、ただ形を作ったというばかりで、まだ本当に完成しているわけではない。私にはまだお前の助けが必要なのだ。どうか私と一緒に、もう一度戻って来てはくれないだろうか。」

こう呼びかけるのを聞いて、イザナミノ命は次のように答えた。

「もっと早く来て下さらなかったことが、悔まれてなりません。もう遅すぎるのでございます。私はこの黄泉国で、不浄な火と水とで炊いた食物を口にしてしまいました。私の身体はもう穢れています。それでも、いとしい背の君が、こうして私をお迎えにわざわざおいでになったというのは、本当に嬉しくて、ありがたいことなのでございますから、私としましては、飛び立っても帰りたい気持ちになりました。しばらくの間、この国の神々に相談して、帰ってよいかどうかうかがってみましょう。ただお断りしておきますけれど、その間は私の姿を御覧にならないで下さいまし。」

このように言って、御殿の中に戻って行ってしまった。イザナギは扉のところに佇んで、言われた通りに待っていたが、時が刻々に過ぎて行くのに、愛する女神の姿はふたたび現れない。あまり待つ間が長いので、ついに待ちかねて、禁を破って中にはいる気になった。あたりは暗黒である。イザナギは角髪に結ったその髪の毛の、左側に垂れた部分に挿していた爪櫛を手にとった。櫛の歯の一番端にある大きな歯を一本折り取ると、そこに火をつけて、あたりを照らし見ながらそろそろと御殿の中に進んだ。乏しい光に照らされて、やがてイザナミの姿がようやく眼に映ったが、なんという有様だろう、それはもはやかつて知っていた妻の姿とは全く違っていた。身体中に小さな蛆がたかってくるくねと動き、しかもその身体に、女神の頭には大雷（オホイカツチ）がいるし、その胸には火雷（ホノイカツチ）がいるし、その腹には黒雷（クロイカツチ）がいるし、陰処には折雷（サクイカツチ）がいるし、左手には若雷（ワキイカツチ）がいるし、右手には土雷（ツチイカツチ）がいるし、左足には鳴雷（ナルイカツチ）がいるし、右足には伏雷（フシイカツチ）がいるし、つごう八柱の雷神（イカツチカミ）が、おどろしくも女神の腐れ果てた身体から生れ出していた。

イザナギノ命はこの有様を見て、恐怖に凍りついたようになり、今までの張りつめた気持もすっかりゆるんで、恐れおののきながら一目散にそこを逃げ出した。イザナミノ命は夫

が自分を捨てて逃げ帰って行くのを見ると、

「あなたというかたは、私の恥かしい有様を御覧になりましたね。」

こう口惜しげに叫び、さっそく、黄泉国の醜い女神たちの群に命じて、そのあとに追いか
けさせた。イザナギは追われて一心に逃れ走ったが、次第に危くなったので、髪の乱れぬ
ように縛ってあった黒い蔓を取りはずして、これを後方に投げ捨てた。地に落ちた蔓は、
野葡萄の実となって生え、ヨミの女神たちが端からその実を掴んで食べ始めた間に、なお
遠く逃れることが出来た。しかし女神の群はやがて野葡萄の実を食べ終ると、また、あと
を追いつき始め、ふたたび危急が迫って来た。イザナギは今度は角髪に結ったその髪の右側に
刺した櫛を取り、その齒を折り取ってはこれを後方に投げ捨てた。

地に落ちた櫛の齒は、竹の子となって生え、夜見の国の女神たちが端からそれを引き抜い
て食べ始めた間に、さらに遠くへ、遠くへと逃れて行った。

一方、イザナミはいっそうの憤怒にたけて、さらに、その身体から生れ出た八柱の雷神
に命令し、これに千五百人の夜見の国の軍隊をつけて、夫のあとを追いかけてさせた。この
ような大軍に迫られてイザナギは、その腰に帯びた、長さ十握もある十拳剣を抜き放ち、
夜見の者どもを嫌ってこれを後手に持つと、宙に打ち振りながら遠くへ、遠くへと逃れて
行った。それでも追跡の者どもは、なお追いついて来たが、イザナギはようやくにして、
死者の国とこの世との境にある黄泉比良坂という坂の麓まで、辿り着くことが出来た。

その時、坂の麓にあって桃の実を三つ取り上げると、追いついてを待って烈しくこれを打ちつ
けたから、その勢いに夜見の者どもは怖れをなして、ことごとく逃げ帰ってしまった。や
っとのことで危急を逃れたイザナギノ命は、そこで桃にこう言った。

「お前は今、私を助けてくれたが、葦成るこの豊かな葦平中国に住む、ありとあらゆる命
すこやかな人たちが、もしや辛い目にあって苦しむようなことがあれば、私同様に助けて
やっておくれ。」

こう言って、大神の実という意味の意富加牟豆美命（オホカムヅミノミコト）という名を
桃に与えた。

イザナミは追跡のことが失敗したのを知ると、最後に自分みずから夫のあとを追って追っ
て来た。イザナギはそこで千人力でやっと動くほどの大岩を引きずって、これを黄泉比良
坂の中央に据えて、その石を間に置いたまま、これ限りなく契を解くことを妻に申し渡し
た。

この言葉を聞いたイザナミノ命が言うには、

「いとしい我が背の君よ、もしあなたがそのようなひどいことをなされるならば、あなた
の国の人々を一日に千人ずつ絞殺してあげましょう。」

これに対して、イザナギノ命は答えて言った。

「いとしい我が妻よ。お前がそんな非道なことをするならば、私の方は一日に千五百の産
屋を建てて、子供を生ませることにしよう。」

こういう誓があったために、一日に必ず千人の人が死に、その代りに一日に必ず千五百人

の人が生れるわけなのだ。そこで、このイザナミノ命のことを。黄泉津大神（ヨモツオホカミ）と言う。また夫のあとに追いついたので、道敷大神（チシキノオホカミ）と言うとも伝えられている。また夜見の坂にあって道をふさいだ岩は、女神を追い返したゆえに道反大神（チガヘシノオホカミ）とも言い、塞坐黄泉戸大神（サヤリマスヨミドノオホカミ）とも言う。またここに言うところの黄泉比良坂は、今の出雲国にある伊賦夜坂であるとも言われている。

5 禊ぎはらい

イザナギノ命はようようのことで危急を逃れて国へ帰ったが、その時このような感慨を洩らした。

「思えば私は、なんという厭な、醜い、きたならしい国にわざわざ出かけて行ったものだろう。私の身体はすっかり穢れてしまった。この穢れた身体の禊をしなければならない。」こう言って、筑紫の国の、朝日の射す、橘の木の青々と生い茂った、海に近い河口のあたりの阿波岐原で、穢れた身体を清めるための禊ぎ祓いの儀式を行った。そこでまず手にした杖を投げ捨てたが、この杖から生れた神の名は、禍のここに近づくなという意味の衛立船戸神（ツキタツフナドノカミ）。次に帯を解いて投げ捨てたが、この帯から生れた神の名は、道中の安全を守る道之長乳齒神（ミチノナガチハノカミ）。次に腰の下に巻いた裳を投げ捨てたが、この裳から生れた神の名は、解き置くという意味の時置師神（トキオカシノカミ）。次に上に着た衣を投げ捨てたが、この衣から生れた神の名は、煩いから免れた意味の和豆良比能宇斯能神（ワヅラヒノウシノカミ）。次に裳の下に着ていた禪を投げ捨てたが、この禪から生れた神の名は、ちまたを守る道俣神（チマタノカミ）。次に冠を投げ捨てたが、この冠から生れた神の名は、穢の明けたことを示す飽昨之宇斯能神（アキグヒノウシノカミ）。次に左手に纏いた玉飾を投げ捨てたが、この左の玉飾から生れた神の名は、奥疎神（オキザカルノカミ）。次に奥津那芸佐昆古神（オキツカヒベラノカミ）、いずれも海神で、沖と、渚と、その中間の海とを示している。次に右手に纏いた玉飾を投げ捨てたが、この右の玉飾から生れた神の名は、辺疎神（ヘザカルノカミ）。次に辺津那芸佐昆古神（ヘツナギサビコノカミ）。次に辺津甲斐弁羅神（ヘツカヒベラノカミ）、いずれも意味は同じである。

以上に述べたフナドノ神からヘツカヒベラノ神まで、十二柱の神は、身に着けていたものを脱ぎ捨てたことから生れ出た神である。

こうして身に着けたものをすべて脱ぎ捨てたイザナギは、朝日にきらきら輝いている河の流れに眼をやった。

「上の瀬は潮の流れが速い。下の瀬は潮の流れがゆるやかだ。」

このように呟き、初めて中の潮のあたりに下りて行って、冷たい河の中にくぐって、身体に水をそそぎかけて洗い清めた。その時に生れた神の名は、八十禍津日神（ヤソマガツヒ

ノカミ)。次に大禍津日神(オホマガツヒノカミ)。この二神は、イザナギがかの醜い夜見の国に出かけた時に、身体について来た穢がもととなって生れ出た神である。次に、この穢を直そうとして生れた神の名は、神直毘神(カムナホビノカミ)。次に大直毘神(オホナホビノカミ)次に穢をそそいで滑らかになったことを示す伊豆能売神(イツノメノカミ)次に水の底深く沈んで身体をそそいだ時に生れた神の名は、底津綿津見神(ソコツワツミノカミ)。次に底筒之男命(ソコツツヲノミコト)。次に水の中で身体をそそいだ時に生れた神の名は、中津綿津見神(ナカツワツミノカミ)。次に中筒之男命(ナカツツヲノミコト)。次に水の表に出て身体をそそいだ時に生れた神の名は、上津綿津見神(ウハツワツミノカミ)。次に上筒之男命(ウハツツヲノミコト)。いずれも星により航路を定めた当時の海路を守る神である。

これら三柱のワツミノ神は、海人の部族を統べた安曇の連などが、祖先の神として仕えている神である。すなわち安曇の連などは、このワツミノ神の御子である宇都志日金拆命(ウツシヒガナサクノミコト)の子孫にあたる。またここにあげたソコツツヲノ命、ナカツツヲノ命、ウハツツヲノ命の三柱の神は、のちの住吉である墨江の三座の大神である。

つづいてイザナギが、左の眼を洗った時に生れた神の名は、天照大御神(アマテラスオホミカミ)。次に右の目を洗った時に生れた神の名は、月読命(ツクヨミノミコト)。次に鼻を洗った時に生れた神の名は、建速須佐之男命(タケハヤスサノヲノミコト)。

以上に述べたヤソマガツヒノ神からハヤスサノヲノ命まで、十四柱の神は、身体を洗い清めたことから生れ出た神である。

ここにおいてイザナギノ命は、心から歡喜の叫びをあげて次のように言った。

「私は子供を次々と生んで来たが、その最後において、三人の世にも尊い子供たちを得たのは、なんという嬉しいことだろう。」

こう言って、頸に掛ける玉飾を手にとったが、長い緒に貫かれた玉の群は、そのときらかな音色を發した。そしてなお音色のゆらゆらと響くうちに、この玉飾をアマテラス大御神に手渡ししながら、

「お前は私に代って高天原を治めよ。」

こう命じ、仕事を任せしるしに、その玉飾を賜った。そこでこの頸につける玉飾の名を、御倉板拳之神(ミクラタナノカミ)と言う。

次にツクヨミノ命には、

「お前は私に代って夜之食国を治めよ。」

こう命じ、仕事を任せた。

次にタケハヤスサノヲノ命には、

「お前は私に代って海原を治めよ。」

こう命じ、仕事を任せた。

こうして、昼の国と、夜の国と、海原とが、三人の御子たちの手に委ねられた。

6 うけいの勝負

こうして三人の御子たちは、父君の命令に従ってそれぞれの国を治めることになったが、ただそのうち、速須佐之男命（ハヤスサノヲノミコト）だけは例外だった。スサノヲノ命は海原を治める仕事を命じられたにもかかわらず、少しもその事に当ろうとせず、その鬚が八握もあるほど長くなり、胸元に垂れ下るほどになっても、なお足ずりをして大声に泣き喚いていた。その泣く有様の烈しいことは、青々と草木の茂る山々も、枯木の山となるまでに泣き枯らし、波の立ち騒ぐ海や河も、水の一滴もなくなるほど泣き乾してしまう勢いだった。これではどうして国を治めることなど出来よう。悪い神々はここぞとばかり騒ぎ始め、その声は五月の蠅がそこここから湧き立つようにあたりに満ち、あらゆる禍いという禍が一時に起ってきた。

イザナギノ大御神はこの有様を見て、スサノヲノ命に次のように尋ねた。

「いったいどういうわけがあって、お前は私がせっかく仕事を任せた国を治めようともせず、そんな地だんだを踏んで泣いているのだ？」

こう訊かれて、スサノヲノ命は次のように答えた。

「私は妣の国が恋しくてならないのです。亡くなられた妣のいるという、地の底の、根之堅洲国に行きたいと思うので、それゆえこうして泣いてばかりいるのです。」

この答の言葉を耳にして父なる大御神はたいそう立腹した。

「そういうことを言うのなら、お前は好きにするがよい。この国に住んではならぬ。」

こう命令されて、スサノヲノ命を追い払ってしまった。

このイザナギノ大御神は、のちの近江である淡海の大賀に鎮座している。

父君に追われたスサノヲノ命は、次のように言った。

「それでは致しかたがありません。姉君のアマテラス大御神にお暇乞いをして、妣の国へ行きましょう。」

そして言葉通りに、姉君の治める高天原へと上って行ったが、この荒びた神が近づくにつれて、山も河もことごとく鳴り響き、大地は地震のように揺れ動いた。一方、アマテラス大御神の方は、この報せを聞いてたいそうおどろき、これは唯ごとではないと考えた。

「我が弟君がこうしてわざわざ高天原へ出かけて来るというのは、必ずや善良な心から出たものではないように思われる。私の国を奪い取ろうとする異心を隠し持ったのことに違いない。」

こう言って、さっそく、男の形に身支度をととのえた。すなわち、まずその髪を解き、これを二つに分けて男の髪形である角髪に束ね、左右の角髪にも、五百箇の勾玉を緒に貫いた長い玉飾を帯び、背中には、千の矢を収める鞆を負い、脇には、五百の矢を収める鞆をつけ、また左の腕には、矢を放つ時弦が触れて音を発するための鞆を巻きつけた。その上で弓の上弭を取って宙に振り立て、両足で代る代る堅い地面を踏み、まるで泡雪を蹴散ら

すように土を跳ね返しなが、股まで沈むほど地面を強く打ちつけた。こうして地面を踏みしめ踏みしめ、露ほども恐れる様子もなく、弟君の来るのを待ち受けた上、烈しく次のように問いかけた。

「お前がこうして私の国へ上って来たというのは、いったいどういうわけなのか？」

姉君に問いただされて、スサノヲノ命は次のように答えた。

「私は決して姉君に背く心を隠し持っているわけではありません。ただ父君なる大御神が、私の泣いているのをどうしたことだとお尋ねになりましたので、私は、妣の国へ行きたいと思ってそれで泣いておりますと答えたところ、大御神は、それではこの国には住んではならぬと仰せになって、私を追い払ってしまわれました。私はそこで妣の国へ参るつもりなのですが、その前に姉君にお別れの挨拶をしようと思い、それでこうして高天原へ上って来たわけなのです。誓って、背く心などを隠しているわけではありません。」

この答の言葉を聞いて、アマテラス大御神は次のように尋ねた。

「お前は口ではそう言うけれど、本当にお前の心が清らかなことを、どうしたら知ることができよう？」

これに対して、スサノヲノ命は次のように答えた。

「それでは二人が、それぞれ、神に誓を立ててうけいをするにしましょう。二人がそれぞれ子供を生んで、その子供によって、私の心が清らかかどうか、神意を判断することにしたらどうでしょうか？」

そこで約束が定まって、いよいよ天安河を間にはさんで、姉と弟との二柱の神が、神意を尋ねるためのうけいの儀式を取り行うことになった。初めにアマテラス大御神が、弟君の帯びていた、長さ十握もある十拳剣を貰い受けると、これを三段に打ち折った。そして緒に貫いた玉飾がきららかな音色を発している間に、河のほとりに掘った天之真名井の清冽な井戸水を、三つに折った剣にそそいで洗い清め、これを口にして噛みに噛んだ。その上でふっと吹き出すと、口から洩れた息が霧となって、そこに現れた神の名は、河の早瀬を示す多紀理毘売命（タキリビメノミコト）、その別名は奥津島比売命（オキツシマヒメノミコト）と言う。次に市寸島比売命（イチキシマヒメノミコト）、別名は狭依毘売命（サヨリビメノミコト）と言う。次に多岐都比売命（タギツヒメノミコト）。

つづいて、今度はスサノヲノ命が、姉君の左の角髪に纏いてあった、五百箇の勾玉を緒に貫いた長い玉飾を貰い受け、それがきららかな音色を発している間に、天之真名井の清冽な井戸水をそそいで洗い清め、これを口にして噛みに噛んだ。その上でふっと吹き出すと、口から洩れた息が霧となって、そこに現れた神の名は、誓に勝って勝ちずさびたことを示す正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命（マサカツアカツカチハヤビアメノオシホミミノミコト）。また姉君の右の角髪に纏いた玉飾を貰い受け、噛みに噛んで、ふっと吹き出す息が霧となって、そこに現れた神の名は、天之菩卑能命（アメノホヒノミコト）。また髪を縛った鬘に纏いた玉飾を貰い受け、噛みに噛んで、ふっと吹き出す息が霧となって、そこに現れた神の名は天津日子根命（アマツヒコネノミコト）。また左の手に纏いた玉飾を貰い受け、噛み

に噛んで、ふっと吹き出す息が霧となって、そこに現れた神の名は、活津日子根命（イクツヒコネノミコト）。また右の手に纏いた玉飾を貰い受け、噛みに噛んで、ふっと吹き出す息が霧となって、そこに現れた神の名は、熊野久須毘命（クマノクスビノミコト）。

ここにおいて、アマテラス大御神は弟君に次のように言った。

「あとから生れた五人の男の子たちは、私の持物によって生れた。従ってこの五人は、しぜん、私の子ということになる。先に生れた三人の女の子は、お前の持物によって生れた。従ってこの三人は、しぜん、お前の子ということになる。」

このように言って、明かに区別をした。

このうち、先に生れた神のうち、タキリビメノ命は、のちの筑前宗像であるむな形の奥津宮にいる。次にイチキシマヒメノ命は、むな形の中津宮にいる。次にタギツヒメノ命は、むな形の辺津宮にいる。この三柱の神は、筑紫の氏族であるむな形の君などが仕え祭っている三座の大神である。

また、あとから生れた五柱の御子のうちで、アメノホヒノ命の御子は、天降って辺境を平定した意味の建比良鳥命（タケヒラトリノミコト）である。

この神は、出雲の国造（その国を治める地方官の賜わる姓）、のちの武蔵である无邪志の国造、のちの上総海上である上つ菟上の国造、のちの下総海上である下つ菟上の国造、のちの夷隅である伊自牟の国造、のちの対馬である津島の県直（国造と同格の姓）及び遠江の国造、以上の人々の祖先である。次にアマツヒコネノ命は、凡川内の国造、額田の部の湯坐の連（部は同一血族、あるいは一定の職務を有する団体で、世襲の首長を持つ。連は部民の首長に賜わる姓）、茨木の国造、大和の田中の直（直は姓）、のちの山城である山代の国造、のちの上総望蛇である馬來田の国造、道尻の岐閉の国造、のちの周防である周芳の国造、大和の淹知の造、高市の県主（県主は姓）、蒲生の稻寸（稲寸は姓）、三枝部の造、以上の人々の祖先である。

この時スサノヲノ命は、姉君のアマテラス大御神に向かって、悦ばしげに次のように言った。

「それ御覧なさい。私の心は清らかでなんの異心も隠してはいなかった。それゆえ、私の生んだ子供は心のやさしい女の子だったじゃありませんか。うけいをしてみたらこういう結果になったのだから、この勝負は私の勝ですね。」

こう叫ぶと、勝ったあまりの勢いで、姉君が手ずから作っている田の中に踏み入って、畦をめちゃめちゃにしたり、田に水をそそぎ入れる溝を埋めたり、またその年の新嘗をいただく神聖な御殿に、糞をして廻るといような、狼藉の限りを尽した。

こういう乱暴な振舞を見ても、アマテラス大御神の方は格別咎めようともせずに、ただ次のように繰り返した。

「弟が糞をしたと言って騒ぐけれども、あれはきっと弟が酒に酔って、あちこち吐き散らしたまでのことでしょうよ。我がいとしい弟のことだから、きっとそうなのでしょう。それにまた、田の中の畦をめちゃめちゃにしたり、溝を埋めたりしたというの、あれは耕

せば田となる土地を、ああして畦や溝にしておくのは惜しいものだと考えて、それでしたことでしょうよ。我がいとしい弟のことだから、きっとそうなのでしょう。」

こう言って、弟君のしたことを善い方にとって言訳をしてやったが、肝心のスサノヲはそれを聞いても、少しも乱暴な振舞をつつしもうとはせず、いっそう狼藉がつのって行くばかりだった。

ある日、アマテラス大御神は、神に献上するための衣を織る、忌服屋と呼ばれる神聖な御殿の中であって、織女たちが衣を織るのを眺めていた。すると乱暴者のスサノヲは、その建物の棟に登ってそこに大きな穴をあけると、斑色をした馬の、その皮を逆剥ぎに剥いだ無慚な代物を、その穴から真逆様に投げ込んだ。折から機を織っていた織女の一人は、これを見るや驚きのあまり、機具の梭の端のところで陰刃を突き、それがもとで死んでしまった。弟君のあまりに荒々しい仕業を見て、アマテラス大御神もすっかり恐ろしくなり、天石屋の中に身を隠してしまった。そして戸を鎖し、びくとも動かぬようしっかりとその戸を締め込むと、もはやその中から姿を現わそうとはしなかった。

7 天石屋戸

日の神であるアマテラス大御神が、スサノヲノ命の悪行を恐れて天石屋の奥深く籠り、その戸をぴったりと鎖してしまったので、たちまちのうちに天上の高天原は太陽が沈んで暗く、地上の葦原中国も太陽が沈んで暗くなった。こうして日が経っても太陽が現われることがなかったから、天も地も至るところ暗々の闇であり、今日も明日も永遠の夜となった。悪い神々はここぞとばかり騒ぎ始め、その声は五月の蠅がそこここから湧き立つようにあたりに満ち、あらゆる禍という禍が一時に起って来た。

この大事件を協議するために、八百万という数の神々が天安河の河原にしげんに集まり来たって、ここに会議を開いた。高御産巢日神（タカミムスビノカミ）の御子である思金神（オモヒカネノカミ）は、多くの神の思慮を一人で兼ね持つほどの、較べものもないほどの智慧者であったから、この神の深謀にもとづいて、以下のような謀を凝らすことになった。まず、闇夜に長く長く鳴く長鳴鳥の鶏を、数多く集めて来て、いっせいに鳴かした。天安之河の河原にある堅い岩を取り、天金山にある鉄を取り、鍛冶を業とする天津麻羅（アマツマラ）を呼び寄せて、矛を作らしめた。次に伊斯許理度売命（イシコリドメノミコト）の仕事として、鏡を作らしめた。次に玉祖命（タマノヤノミコト）の仕事として、五百箇の勾玉に緒に貫いた長い玉飾を作らしめた。次に天児屋命（アメノコヤネノミコト）と布刀玉命（フトタマノミコト）とを呼び寄せ、天香具山に住む牡鹿の肩の骨を丸抜に打ち抜き天香具山に生える朱桜の木を取って、鹿の骨を木の皮で焼く鹿トの占いを行わしめて、オモヒカネノ神の謀を神意に尋ねた。その結果は良しと定まったので、天香具山に生える、青々と葉の茂った榊の木を、根こそぎに掘り起して、その上枝には、五百箇の勾玉を緒に貫いた玉飾を取ってつけ、その中枝には、八咫鏡を取って懸け、その下枝には、白い木

綿の和幣、青い麻の和幣を取って垂らした。これらさまざまの品は、フトタマノ命が神前にささげる御幣として、うやうやしく両手に捧げ持った。アメノコヤネノ命は、日の神がふたたび岩屋戸の中からお出ましになるよう、祝詞を奏上した。力持ちの天手力男神（アメノタヂカラヲノカミ）は、岩屋戸の脇にこっそりと忍び隠れた。こうした準備をととのえたところで、男まさりの女神である天宇受売命（アメノウズメノミコト）が、天香具山に生える日蔭葛を取って襷に掛け、髪のを乱れをふせぐために正木葛を取って頭に巻いて鬢となし、さやさやと鳴る笹の葉を束ねて手のうちに持ち、天岩屋戸の前に、中がうつろな台を設け、そこに登って足拍子面白く、音のとどろくばかり踊った。その踊りの様は、神が乗り移ったかに見えるばかりで、踊り狂ううちには胸乳もあらわになり、腰に結んだ裳緒を下腹のあたりまで押し下げる勢いだった。この神懸りの踊りの面白さに、高天原が揺れ動くまでに、集まった八百万の神々が声を合わせて笑った。

一方、アマテラス大御神は、岩屋の奥深く閉じこもっていたが、神神の愉しげに笑い興じる声が、波音のようにここまで聞えて来るので、不審の気持をとどめることが出来なかった。そこで嚴重に閉め切った石屋戸を細めに開き、中から次のように尋ねた。

「私がこうして隠れている以上は、当然高天原も暗く、葦原中国も暗くて、ひっそりしていることと思っていたら、これはいったいどういうことなのか？なんのわけがあって、アメノウズメはそうして踊り廻っているのか？神々たちはそうして声をあげて笑うのか？」こう訊かれて、さっそく、アメノウズメが踊りをやめて答えて言うには、

「あなた様よりも、もっと尊い神様がここにおいでになりますので、それで私どもは喜んで、笑ったり踊ったりしているのでございます。」

こう答えている間に、アメノコヤネノ命とフトタマノ命とが、かねての鏡を差し出して、アマテラス大御神に見せた。見ればなるほど、そこには一柱の尊い神様のお姿が、明るく照り輝いて映っているのであるから、アマテラス大御神はいよいよ不思議なことだと考えて、少しばかり戸の中から出て様子を見ようとした。この時を待ちかねて今まで隠れていたアメノタヂカラヲノ神は、さっそく日の神の手を取って、岩屋戸の前へと引き出した。一方フトタマノ命は、素早くそのうしろに注連縄を張りめぐらして、こう言った。

「これより内側には、二度とお戻りにならないで下さい。」

こうして、アマテラス大御神がふたたび姿を現わしたので、その時、天上の高天原も、地上の葦原中国も、しぜんに前のように明るく照り輝くこととなった。

8 須佐之男命の追放・穀種

こうして、アマテラス大御神が天岩屋戸に隠れた事件も、めでたくもどのように収まることが出来たが、事件の原因となったハヤスサノヲノ命を処罰することが残っていたので、

八百万という数の神々が集まって、会議を開いた。その結果、スサノヲ命が犯した重い罪を清めるために、千の座の上に罪を贖う品物を載せて、差し出すように命じた。それでもなお罪を清めるには充分でなかったため、その鬚を切り、手足の爪をも抜いてしまって、さらに高天原から追い払ってしまった。そこでスサノヲは、食物をつかさどる女神である大気津比売神（オホゲツヒメノカミ）に、食物を所望した。オホゲツ姫はその鼻、その口、その尻からいろいろの食べものを取り出し、こうした材料を種々塩梅して作りあげた御馳走を、スサノヲに差し出した。しかし怪しんだスサノヲは、姫のなすところをこっそり立ち見して、これはわざと穢いものを自分に食べさせるつもりなのかと考え、たちまち乱暴な心が起って、オホゲツ姫を殺してしまった。

そこでこの殺された女神の身体から、次のようなものが生れた。すなわち、その頭には蚕が生れ、その二つの目には稲種が生れ、その二つの耳には粟が生れ、その鼻には小豆が生れ、その陰処には麦が生れ、その尻には大豆が生れた。そこで穀物の祖先の神である神産巢日御祖命（カミムスビミオヤノミコト）が、これら五種の穀物を取り集めさせて、これを種とした。